

わが告白 総理辞任の真相

突然の異変。嫌な予感がした。難病の再発か？そして人生最悪の失敗——

安倍晋三
(前内閣総理大臣)



私は昨年九月十二日、内閣総理大臣の職を辞すことを表明し、九月二十五日に安倍内閣は総辞職いたしました。一昨年九月の首相就任以来、私の目指す国づくりに期待を抱き、支持して下さった国民の皆さまを裏切る結果となったことは、誠に慚愧に堪えず、深くお詫び申し上げます。

昨年七月の参院選で自民党は大敗を喫しました。民主党が参院において第一党となり、いわゆる衆参のねじれ現象を引き起こしたため、福田康夫首相の国会運営に非常なご苦労をお掛けしております。また年金記録問題についても福田政権にさらなる十字架を背負わせることとなってしまいました。本来ならば、私が総理の座にとどまり、先頭に立って難局に立ち向かっていかなければならないのですが、その責務を断

念してしまったことを痛切に反省いたしております。

すべてのマスコミが私が総理の座を「投げ出した」と報じました。結果的に所信表明直後という最悪のタイミングで辞任したわけですから、むしろ当然の批判なのかもしれません。しかし実際の私の胸中は「投げ出した」とは対極にあります。政治家にとって、総理大臣は理念と政策を実現するための究極の目標であり、厳しい選挙を重ね、苦勞の末に辿り着いたその地位をそんなに簡単に投げ出すはずありません。

では、なぜ私は辞任を決断するに至ったのか。九月十二日の会見で私は、辞任の理由として、「テロとの戦いを進めていくには局面を転換しなければならぬ」と申し上げました。その後、入院中の慶応大学病院で行った会見

では、「体調が悪化し、体力の限界を感じるに至り、もはや首相としての責任を全うし続けられないと決断した」と説明しました。当初、健康問題について言及しなかったこともあって、辞任の理由については様々な憶測が飛び交い、国民の皆さまに理解していただくための努力も十分ではなかったと今でも大変申し訳なく思っております。

昨年十二月、私は官邸の元スタッフと一緒に東京八王子の高尾山を訪れました。途中、休みながらではありましたが、標高五九九メートルを踏破することができました。そして何より嬉しかったのは、登山中に出会った方々が、突然総理の座を去った私に対して、「お元氣になってよかったですね」

「心配してたんですよ」と声を掛けて下さったことでした。辞任から三カ月、体調もほぼ回復し、当時の状況を冷静に振り返ることができるようになった今こそ、改めて国民の皆さまに、辞任に至る経緯について可能な限り率直に説明したいと思えます。

初めて明かす「持病」

昨年七月二十九日に行われた参院選は、自民党にとって、三十七議席という大変衝撃的な結果となりました。私も相当難しい戦いになるという覚悟はしておりましたが、選挙応援で全国を飛び回っていますと、後半は追い上げている手応えもあっただけに国民の審判は想像以上に厳しいものでした。

これまでも橋本龍太郎元総理や宇野宗佑元総理など、参院

選の敗北が原因で職を辞したケースはありません。ただし、この時点では辞職するつもりはまったくありませんでした。政権選択選挙はあくまで衆院選であり、衆院選と三年ごとの参院選でその都度政権が代わる可能性があるというのでは、外交政策はもちろんのこと、安定した政権運営も難しくなりません。そうした信念がありましたから、「ここで小泉純一郎総理から引き継いだ改革路線を変えてはいけません」と統投を決意しておりました。当然ながら、相当苛酷な状況が待ち受けていることは覚悟の上で、それに対峙していこうという強い気持があったのです。統投は誰にも相談せずに私自身の判断で決めました。

投票日の夕方には麻生太郎外相(当時)が公邸に訪ねて来られ、「総理が統投を決断するなら、私は支持します」と仰りました。麻生氏と入れ替わるようにやってきた中川秀直幹事長(当時)は「総理、統投されるんですか？ 最後は総理のご判断ですが、それは茨の道ですよ」と仰りましたが、私の気持は揺らぎませんでした。

最初に異変が起きたのは、広島に原爆死役者慰霊式に行く前日でしたから、八月五日のことだったと思います。胃と腸に痛みを感じました。それが原因で食欲がまったくなくなっていました。何を食べても体がなかなか受け付けません。味もほとんど感じられないし、美味しくない。それでも無理して食べると、ムカムカと気持ちが悪くなってしまいうのです。嫌な予感がしました。

私はもともと「潰瘍性大腸炎」という持病を抱えておりま

す。これまで公にこの病気についてお話ししたことはありません。政治家にとって、病気はタブーであり、病名や病状が公になれば、政治生命を危うくすることさえあります。しかし、今回の辞任の理由をご理解いただくには、この持病についても包み隠さず告白すべきだと考えるに至りました。

潰瘍性大腸炎は厚生労働省が特定疾患に指定している難病で、いまだに原因は解明されておりません。初めて発症したのは十七歳の頃でした。その時の衝撃は今も忘れることができません。尾な話を許しただきたいのですが、激しい腹痛に襲われ、トイレに駆け込んだところ、夥しい量の下血があり、便器が真っ赤に染まったのです。この病気は精神的に落ち込みやすい病気だといわれています。下血により、多少貧血にもなりますし、何より、トイレに行くたびに鮮血を目の当たりにするわけですから、気が滅入ります。

自己免疫疾患といって自分の免疫が異物と勘違いして自分の腸の壁を攻撃し、その結果、腸壁が剥落し、潰瘍となり、爛れて出血するのです。腸壁が刺激されるたび、三十分ほどくらい頻度で便意をもよおします。夜もベッドとトイレの往復で、到底熟睡できません。内視鏡で大腸内を見たときも大きなショックを受けました。ポロポロに傷つき、はげ落ちた腸壁の映像の生々しさは、想像を超えていました。

初めての発症以来、年に一度はこの病気に悩まされてきました。だいたい二週間ほどでおさまるのですが、長い時は一カ月以上続くこともあります。最初の頃は医師も病名さえわからず、潰瘍性大腸炎であると診断されたのは社会人になっ

動に著しく支障が生じる。家内からは、「もう政治家なんて辞めてください」と涙ながらに訴えられたこともあります。当時、地元では、「ガンでこの先長くない」などという怪情報さえ囁かれました。それでも私は政治の道を諦めることなど考えられませんでした。

その後もときに発症することはありましたが、新薬の開発も進み、次第に症状をコントロールできるようになっていきました。そして官房副長官時代に発症したのを最後に、幹事長、幹事長代理、官房長官と充実した多忙な日々を送ってまいりましたが、一度も再発に悩まされることはありませんでした。したがって一昨年九月には、この病気を克服することができたと考え、総裁選立候補を決意いたしました。

「お友達」批判と内閣改造

潰瘍性大腸炎に罹患したか否かは、血液検査で炎症反応を見ればわかります。昨年八月、腹痛を覚えたときには、すぐに主治医である慶應大学病院の日記紀文先生に診ていただきました。診断の結果は、「機能的胃腸障害」でした。ひとまず胸をなでおろし、すぐに潰瘍性大腸炎の発症を抑える薬も処方していただきました。ところが、この胃腸障害が一向によくならないのです。食欲不振が改善されず、お粥しか喉を通りません。それも難しいときには点滴に切り替えました。会食の予定もキャンセルできるものはお許しいただき、断れない場合は無理やり飲み込んでおりました。

てからでした。何の前触れもなく発症し、治るときは嘘のようにビタリとおさまるのが特徴です。体が冷えたり、ストレスが高まったときに発症することが多いようです。治療にはステロイドホルモンを使うのですが、これを一度使ってしまうと、量を減らしていくのが難しいのです。減らすスピードが早すぎると、すぐに再発してしまう。ただし、長く使いつぎると副作用も強い。顔がむくんでムーンフェイスになってしまうこともありますし、さらに骨粗鬆症のように骨ももろくなるといわれています。

今から十年ほど前、自民党国対副委員長を務めていた頃には、三カ月近く入院したこともありましたが、私の場合、発症すると腰痛も併発するのですが、入院当初は歩くこともできませんでした。しかも二カ月間にわたり口から物を食べることもが一切できない。点滴だけです。当時六十五キロほどだった体重は五十三キロにまで減り、お尻の肉がそげ落ちて、寝ていて痛かったことを覚えています。腸に固形物が入ると、腸壁がすり切れ破れてしまうこともあり、そうなるは大腸の全摘手術をしなければならぬケースも出てくるからです。拡が三カ月入院した際にも全摘手術が検討されました。

この病気になると、大腸ガンのリスクが高くなるといわれているため、全摘手術にはガンの危機を取り除くメリットがあります。一方で、胃の場合、全摘しても十二指腸が代替することがありますが、大腸には代わる臓器がないため、トイレの回数の問題が出てくるのです。一日に何度もトイレに行くなくてはならないのでは、選挙運動など政治家としての活動が三カ月入院した際にも全摘手術が検討されました。

この病気になると、大腸ガンのリスクが高くなるといわれているため、全摘手術にはガンの危機を取り除くメリットがあります。一方で、胃の場合、全摘しても十二指腸が代替することがありますが、大腸には代わる臓器がないため、トイレの回数の問題が出てくるのです。一日に何度もトイレに行くなくてはならないのでは、選挙運動など政治家としての活動が三カ月入院した際にも全摘手術が検討されました。

養っていればよかったのかもしれない。この外遊を契機に、病状は一気に悪化しました。機能的胃腸障害とは別に、ウイルス性の潰瘍性大腸炎に罹ってしまったのです。その後、激しい下痢が止まらなくなりました。晚餐会ではエスニック料理がしばしばテーブルを飾りましたが、基本的に残すことは失礼にあたります。無理して食べる努力はしたものの、結局かなり残してしまいました。

帰国後もなかなか下痢は止まりませんでした。「辞める」という考えが初めて具体的に頭に浮かんだのは、そのころのことです。それでも帰国翌々日の八月二十七日には内閣改造が控えており、改造だけやって辞めることなど考えられませんでした。すぐに弱気を振り払い、それからは「早く治ってほしい」と祈るような日々が続きました。改造人事については、出発前に九割方は決まっていたのですが、最後の二割が難航しました。安倍政権は「お友達内閣」との批判を浴びておりましたから、そうしたレッテルを払拭するような布陣を敷く必要があると考えておりました。

「お友達」といいますが、自ら目指す政策を実現していくためには、同じ志を持つ人たちが官邸を固めていくこと自体は当然だと思います。従来の派閥の推薦によってバランスをとるという手法こそが、むしろ批判されてきたはずで、第一次安倍内閣の塩崎恭久官房長官はじめ、副長官、補佐官ら、官邸スタッフ、関係の皆さまは大変有能であり、至らぬ私を最後まで支えていただいたことに感謝しております。ただ、私が若いので、同志の顔ぶれも若い人が中心となる傾向はありました。そこで、内閣改造をする以上、変わったという印象をしっかりと持ってもらえるような組閣が必要だと考えたわけです。いろいろな方がいろいろな意見を具申ししてきましたが、聞くべき部分は聞きながらも、最後は一人で決めました。改造内閣は納得のいく布陣だったと思います。

与謝野馨官房長官、麻生幹事長（いずれも当時）が官邸、党を仕切り、私が「蚊帳の外」に置かれているとの報道もありましたが、そんな事実はまったくありません。必要な報告はすべて受けておりましたし、最後の判断は私がしています。ある官僚の人事をめぐって与謝野官房長官と対立し、それが辞任の引き金となったとの報道もありましたが、一官僚の人事で総理が辞任するなど百パーセントあり得ません。

九月一日、防災訓練の最中に遠藤武彦腹水相（当時）の補助金不正受給問題の二報が飛び込んできました。私はすぐに与謝野官房長官、麻生幹事長と協議し、遠藤腹水相からよく事情を聞くように指示しました。私はBSE問題発生当時、

腹水副大臣としての遠藤氏の活躍を高く評価していました。こうした形で辞職に至ったことは残念でなりません。補助金不正受給そのものは許されるものではありませんが、当時の「政治とカネ」の問題についての報道は、今とはいが様相が遠かったように思います。もちろんそれも総理であった私の責任であることは言うまでもありません。

それまでも閣僚に疑惑が発覚した際の対応が後手に回ってしまったことは事実ですが、何よりも深刻な問題だったのは、マスコミとの間に必要以上に緊張関係をつくり、良好なコミュニケーションを持つことができなかったことです。もともと挑戦的なスローガンを掲げ、また、マスコミとは対峙すべきときには対峙してきたということもあり、より反発を招いたのかもしれない。広報担当補佐官の世耕弘成氏には大変なご苦労を掛けてしまいました。私自身、実際にお会いして、自ら政策などについて説明した方には理解していただけることが多かっただけに、もう少し幅広く、言論人、マスコミの方とお目に掛ければよかったと悔いております。「政治とカネ」報道があそこまで燃えひろがっていった裏には、そうした背景があったのかもしれない。

「職を賭す」発言の真意

九月七日から九日までは、オーストラリアのシドニーでアジア太平洋経済協力会議（APEC）が予定されておりまし

た。帰国当日の九月十日には、所信表明演説があるため、出発前日の六日には、マスコミ各社の論説委員らと所信表明演説についての懇談が開かれました。そのころには食欲不振、睡眠不足が極まり、座っているのも辛く、テキパキとしたやりとりが難しい状況でした。このあたりから体調不良が深刻であるとの情報が一気に駆けめぐったようです。

シドニーでの会見では、海上自衛隊のインド洋における給油活動を継続するためのテロ対策特別措置法について、「職を賭して取り組み、果たせなかった場合、職責にしがみつくことはない」と申し上げました。ただし、この時点ではすぐに辞めることまでは考えておりませんでした。むしろ、遠藤氏の辞任もあり、「政治とカネ」一色になっていた空気を変え、本来しっかりと議論すべきテロ特措法という日本の安全保障上、極めて重要な法案に関心を集中させるための戦略としての決断でした。そしてそのためには、私自身も大きなリスクを背負わなければならないと考えたのです。

日米同盟は日本の安全保障を考える上での基軸であり、万が一、テロ特措法を通すことができれば、その信頼関係が大きく損なわれる恐れがあります。同時に、国連に加盟するアメリカ以外の国々からも法案継続への期待が数多く寄せられており、これはすでに国際公約となっているのです。私が目指してきた「主張する外交」を実現していくためには、国際貢献を果たしていくことは当然の責務であると、今でも確信いたしております。結果的に、シドニーでの「職を賭す」

という発言以降、メディアの、そして世の中の関心はテロ特措法に移りました。

一方で、体調は悪化の一途をたどりました。シドニーではアメリカのブッシュ大統領やロシアのプーチン大統領との会談もあったのですが、これは何とか緊張感を持って乗り切ることができました。その合間には所信表明演説の原稿にも手を入れました。

九月十日早朝五時に帰国したのですが、帰りの政府専用機の中で辞任について初めて真剣に考えました。疲労はピークに達しており、その日、午後二時から所信表明演説が予定されており、本来なら、少しでも睡眠をとっておきたいところですが、機内では一睡もできませんでした。

「もう体力的に限界だ。所信表明の前に辞めるべきか」「いや、きつと最後はよくなる。大丈夫だ」

気持は大きく揺れ動きましたが、結局午後からの所信表明演説に臨みました。あのとき、羽田空港から病院に直行し、そのまま入院するべきではなかったか。後からそう仰る方もおりましたが、そうした考えは浮かびもしていませんでした。

なにしろ食事がまるでとれず、七十キロあった体重も、一月で六十三キロまで落ち込みました。食事がとれないと、体力ががっくりと衰え、体に鉛を流し込まれたように重く感じられます。それにとれない、気力も衰え、思考能力も鈍ってきます。まともな判断が徐々に難しい状態になっていたのかもしれない。それでもなんとか病状が回復してくれない

かとの期待は捨て切れませんでした。入院について付言すれば、病院に逃げ込むことは、都合の悪くなった政治家の常套手段のようでもあり、私はそうした「敵前逃亡」だけはしたくないという気持もありました。結局はその不器用さが裏目に出てしまったのかも知れません。無理して強行した所信表明演説は私にとって最悪の結果となつてしまいました。最初に衆院で演説したときには、まだ張りのある声で読み上げることができたのですが、参院で演説する段階では、体力的にも相当しんどいと痛感しました。集中力も読かず、ついには演説の草稿の文書を三行読み飛ばしてしまいました。それは「来年の洞爺湖サミットに向けて、リーダーシップを発揮してまいります」という箇所だったので、非常に大きな衝撃を受けました。二十分足らずの所信表明演説でこうした無様な姿をさらしたのでは、その後読者、代表質問、予算委員会には到底耐えられないのではないかと。代表質問では三時間、予算委員会では七時間も拘束されることがあるのです。

このままの状態では総理大臣としての職責を果たすことができるか、正しい判断ができるか、国会に十分に対応することができるか、我が身を省みるに、誠に残念ながら、それは不可能であると認めざるを得なかった。それが辞任を判断した最大の理由です。あの三行の読み飛ばしは決定的な要因のひとつだったと思います。

臨時代理を立てて、一週間でも二週間でも入院し、体調を

翌十一日、もう後戻りはできないと腹を決めて公邸を出ましたが、それでもテロ特措法にはなんとか道筋をつけて次にバトンを渡したいとの思いがあり、大島理森国対委員長に、「民主党の小沢一郎代表に党首会談を申し込んでほしい」と指示しました。自らの職と引き替えに、テロ特措法可決に向けて民主党の協力を取り付けたいと私が切望していたのは事実です。

麻生氏とも再び会い、前日より明確に辞意を伝えました。続いて連立与党を組む公明党の太田昭宏代表にも、体調が非常に悪く職務を続けていくことが困難であると伝えました。麻生氏も太田代表も「いや、ぜひとも続けていた方がいい」と仰りました。この日は五時過ぎには官邸を出て、公邸で日比先生の診察を受けました。日比先生には、すぐに入院すべきだと強く勧められましたが、前述したような理由もあり、それを受け入れることはできませんでした。

入院は拒んだものの、私は体調を崩して以降、ずっと危惧していたことがありました。あの思まわしき潰瘍性大腸炎の発症です。実は、下血こそなかったものの、八月には発症を示す血液検査の数値が正常値を超えたこともあったのです。いつ発症してもおかしくない状況でした。ひとたび潰瘍性大腸炎が悪化しますと、トイレに一日三十回も行く必要があります。これは不可能であり、国民の皆さまに多大なる迷惑をお掛けしてしまうことは明らかです。

回復してから復帰すればよかった、とのご指摘もあります。が、そもそも総理が臨時代理を置くことができるのは、総理が欠けたときだけです。「欠けた」とは、死亡した場合か、人事不省に陥ったときを意味します。それが内閣法制局の見解であり、職務を続けるか、辞めるか、しかないのです。

その後、自民党の役員会で読み飛ばしについて謝罪し、役員会の後で麻生幹事長を呼び止めて、部屋に残るように伝えました。そこで麻生氏に「体力、気力が衰え、職務を遂行するのが困難な状況です」と率直に申し上げました。麻生氏は驚いておりましたが、「テロ特措法なら、何とか乗り切れます。今は辞めるタイミングではありません」と必死に慰留されました。総裁選の際に「麻生クーデター説」なるものが流布されましたが、まったくの事実無根です。私は入院中に秘書官からそれを聞かされて、愕然としました。麻生氏には感謝していることは多々ありますが、裏切られたなどと思ったことは、ただの一度もありません。本当に申し訳ないことをしたと思っております。

潰瘍性大腸炎再発の危機

その日の夜、日比先生の診察後、公邸で家内にも「体調が全然よくなりないので、このまま総理を続けるのは難しい」と告げました。家内は「もう十分に我慢してきたんだから、仕方ないと思います」と答えました。

ならば、少なくとも予算委員会が始まる前に辞めた方が、時間的なロスも少なく、大難を小難にとどめることができると考えたのです。九月二十五日にはニューヨークで国連総会が開かれる予定で、日本の総理は一昨年も総裁選のため出席しておりません。二年連続で欠席とされれば、国連軽視との批判を受けかねません。結果的には、総裁選日程の関係で、新総裁の出席は叶いませんでしたが、その時点では一刻も早く総裁選を行う必要があると考えたわけでした。

九月十二日、辞意はすでに掻るぎないものとなっておりますが、テロ特措法可決に自ら道筋をつけることについては、まだ一俤の望みを抱いております。民主党の小沢代表の返答次第では、「今日だけは代表質問を受けよう」という気持ちもあったのです。だから午前十時から十二時過ぎまで、秘書官による代表質問へのレクチャーを受けました。もし党首会談が実現するならば、代表質問は予算委員会に比べ時間も短し、なんとか耐えられるのではないかと思つたのです。

しかし、そのほのかな期待は、秘書官のレクチャー終了直後に掛かってきた大島国対委員長からの電話で打ち砕かれました。私は大島氏をすぐに官邸に呼び、詳しい報告を求めました。大島氏は民主党の山岡賢次国対委員長を通じて会談を申し入れたのですが、とりつくシマがまるでないとのことでした。私は大島氏に「このまま私が総理にとどまっていたのでは、局面を打開するのは難しい」と辞意を表明しました。念の為に断りしておきますが、この党首会談はその後、

